

文法記述における修飾語用法の形容詞ク形をめぐって

On the Description of the Adverbial *-ku* form of Adjectives in Japanese Grammar

加 藤 佳寿美

KATO, Kazumi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第45号 2018年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.45 2018

# 文法記述における修飾語用法の形容詞ク形をめぐって

## On the Description of the Adverbial *-ku* form of Adjectives in Japanese Grammar

加藤 佳寿美

### 1 はじめに

日本語の形容詞の構文的機能は、主として規定語となること、述語となることがあげられるが、このほか修飾語としての機能をもつとされることがある。例えば、第一形容詞の場合、文の中で述語を修飾し、その様態や程度を表すとき、(1)のように語尾が「一く」の形をとるとされる。

(1)私は会社にながく勤めた。(作例)

このような「一く」については、形容詞の活用形とする見解のほか、形容詞から派生した副詞であるとする見解もあり、古くからの議論がある。

本稿では、こうした修飾語として働く「一く」の形を「形容詞ク形」と呼び、先行研究がこれらをどのように文法記述のなかに位置づけているかを概観する。具体的には、2節で形容詞ク形について、これまで主な論点とされてきた品詞分類の問題をとりあげる。次に3節では形容詞ク形の有無やク形があらわす意味に関して、どの程度明らかにされてきたのか整理し、そこからどのような問題点や課題が浮かび上がってくるかについて考察する。

### 2 形容詞ク形は形容詞か副詞か

形容詞ク形に関する最も大きな問題は、日本語の品詞体系におけるその位置づけである。本節では、形容詞ク形を構文的な機能から副詞とする説と、ク形と形容詞の語彙的な意味の共通性から形容詞の活用形とする説を概観する。

#### 2.1 鈴木 (1972)

鈴木 (1972) では、形容詞ク形は、副詞だと認めている。鈴木 (1972) における、形容詞ク形についての扱いをみるためには、はじめにその品詞分類をみておく必要がある。

鈴木 (1972) は、単語の文法的な特性として、

- ・単語の文法的な（形態論的な）カテゴリー

- ・連語論的な要素（かざり・かざられ）になりうる能力（連語における単語のむすびつきの能力）
- ・文論的な要素（文の部分）になりうる能力（文のなかで単語のはたす文法的な役わり）

の三つをあげている。この単語の文法的な特性の体系は、品詞ごとに異なっているとし、品詞とは、「単語のもつ文法的な特性の体系によって分類した単語の基本的な種類」であると定義する。鈴木（1972）の主要な品詞の「文論的な要素になりうる能力」に関する特性をとりだし、次の表1にまとめた。

	主なもの	派生的なもの
名詞	主語・対象語	修飾語・状況語・規定語・独立語（述語）
動詞	述語	規定語・修飾語
形容詞	規定語	述語
副詞	修飾語・状況語	

表1 主要な品詞の文論的な要素になりうる能力（鈴木1972）

表1に示したように、この特性には、主なものと派生的なものがある。表1を部分的にみると、いくつか品詞間で共通するものがあるが、それぞれの品詞の主要なものが独自であり、形容詞には修飾語を認めていないことがわかる。

また、鈴木（1972）では、単語には二つの側面があるとする。一つは、現実のどの断片をさししめすかという語彙的な側面であり、もう一つは文の中でどのような関係を表し、どのような役割を果たすかという文法的な側面である。これらの意味的な側面をそれぞれ「語意的な意味」「文法的な意味」と呼び、「語意的な意味」の性格は、品詞の分類基準には含めない。それは、例えば「あかい（形容詞）——あか（名詞）」のように「おなじ性格の語意的な意味がことなった品詞であらわされることがあるからである」（p. 174）とする。

以上のような「文論的な要素になりうる能力」などの文法的な特性を基準として、「形容詞、形容動詞の連用形とみとめられていたもののうち、動詞（あるいは形容詞）の意味を限定し、文のなかで修飾語や状況語としてはたらくもの」（p. 463）を副詞とし、以下のようにその理由を述べている。

問題の連用形以外の形容詞の形は、名詞のさししめすものやことがらの属性（性質や状態）をさししめし、文のなかでは規定語や述語としてはたらくが、問題の連用形は、そうではなく、動詞（形容詞）をかざり、これらのさししめす属性の属性（ようすや程度など）をさししめし、文のなかで修飾語（あるいは状況語）としてはたらくという点で、質的なちがいがあからである。そして問題の連用形のこうした性格と同様の性格をもつ一群の単語がべつに副詞として

存在するからである。(p. 463)

つまり、鈴木 (1972) は、形容詞ク形のもつ「文論的な」特徴や、文の中での単語と単語の関係をあらわす文法的な意味から、これらを形容詞ではなく、副詞であるとするのである。このようなとらえ方は、他に高橋ほか (2005) などにも見られる。

なお、第一形容詞の第一中止形としての用法や「…をこいしくおもう」「…をしろくする」などの、次の動詞とくみあわさって合成語をつくる用法については、形容詞とみるべきとしている。

## 2.2 村木 (2009)

村木 (2009) は、形容詞ク形に関して、鈴木 (1972) とは異なる見解をしめす。村木 (2009) では、「品詞とは、語彙・文法的な特徴によって単語が分類されたものである」(p. 6) とし、品詞分類に語彙的なものを取り入れる立場をとっている。

村木 (2009) の品詞分類の基準には、意味的な特徴・形態論的な特徴・統語論的な特徴の三つがあげられている。そこでは「品詞の分類に単語の語彙の意味が関与していることは否めないとしても、品詞の認定にはその単語の文法的な特性を問わなければならない」とし、「単語の文法的特性においては、統語論的な特性の形態論的な特性に対する優位性が認められる」と述べる。つまりこの品詞分類の基準三つの優先順位については、「統語論的な特徴」を最優先するべきとしている。その上で、形容詞に次のような機能を認めており、ここには修飾語としての用法が含まれている。

1. 名詞を修飾限定する規定用法 (「赤いバラ」)
2. 述語としての用法 (「庭のバラは赤い。」)
3. 動詞述語を修飾限定する修飾用法 (「庭のバラが赤く咲いた。」) (p. 7)

次に、村木 (2009) における形容詞ク形の扱いをみると、下記のように述べている。これは、主に第二形容詞の「～ニ」について述べた箇所であるが、「美しく」が併記されているため、第一形容詞のク形も同じような扱いであると考えられる。

「美しく」「きれいに」は形容詞の一語形とみず、形容詞から副詞に派生したとする考えもある。(中略)「きれいな部屋」「この部屋はきれいだ」「部屋をきれいに掃除する」の「きれい」の語彙の意味は共通し、一つの単語の異なる用法とみなすことは自然な解釈であろう。もっとも「彼のことはきれいに忘れた」の「きれいに」は、〈すっかり〉の意味で「きれいに掃除する」の「きれいに」とは語彙の意味も異なり、修飾用法しかもたない副詞としなければならない。(p. 10)

ここでは、語彙的意味が「きれいな」「きれいだ」と共通する「きれいに掃除する」に関しては、形容詞の一語形とし、語彙的意味が異なる「きれいに忘れた」に関しては、副詞としている。このような考え方は、畠（1991）にも見える。畠は、問題のク形を副詞とみなす考え方もあるとしながら、語彙的意味の一貫性など、もとの形容詞との共通性が深い場合は、形容詞の連用形の副詞用法とされるのが一般的で、逆に語彙的意味の一貫性が薄れると、それは一語として独立し、副詞と認められるに至ると説明している。

修飾語の形容詞ク形が副詞か形容詞かという問題について、意見の一致は難しい。しかし、このように意見がわかれている形容詞ク形の実態を探るために、形容詞における統語論的な機能と意味との関係についての詳細な調査が必要であると思われる。次節では、そのような調査に関連する研究をいくつか取り上げ、論点を検討していく。

### 3. 形容詞の統語論的な機能と意味との関係

では、形容詞における統語論的な機能と意味との関係については、どのような点が明らかにされているのだろうか。以下では、この点について明らかになっていることを確認するため、次のような観点から先行研究を整理していく。

観点A：どのような形容詞が修飾語用法をもつのか。あるいはもたないのか。

観点B：修飾語用法の形容詞はどのような意味を表すのか。

観点C：修飾語用法の形容詞の意味は述語用法・規定語用法での意味とどのように異なるのか。

#### 3. 1 西尾（1972）

西尾（1972）は、文学作品、論説文、「現代雑誌九十種」の用例、「総合雑誌」の膨大な用例を資料として用いて、形容詞の意味・用法を記述したものであり、観点Bに関する考察がみられる。

西尾（1972）では、修飾語用法は「連用修飾用法」と呼ばれている。この連用修飾用法に関しては、形容詞と「主体」<sup>1)</sup>との関係という観点から、形容詞を「ものに関する属性」「ひとに関する属性」「ことの属性」<sup>2)</sup>というグループに分類している。以下に、西尾（1972）の指摘する、それぞれのグループの形容詞の連用修飾用法にみられる意味的な特徴を、表2としてまとめた。

	ものに関する属性	ひとに関する属性	ことの属性
意味的特徴	動作の結果の状態を表す	一時的な態度・ようすを表す	程度が大きいことを表す

表2 連用修飾用法の意味的な特徴（西尾1972）

以下、それぞれのグループの連用修飾用法について、西尾（1972）が述べていることを示す。

まず、「ものに関する属性」の形容詞では、空間的な量・色・音・味・においなどを表す形容詞の連用修飾用法は「動作の結果の状態を表すことが多い」(p. 68)とする。(例文は西尾(1972))<sup>3)</sup>

(2)白地に紺一色で葉げいとうを大きく染め上げた、すがすがしい柄。(婦人倶楽部)

(2)の「大きく」のような例については、「ものの静的な属性を表すものが多く、それらは動的な動作そのものようすを表すことができないのが原則なのであろう」(p. 69)としている。ただし、幾つかの例外があるとして「円るく転んで行った」などを挙げている。

次に、「ひとに関する属性」の形容詞は、ある人のそなえている「持続的な属性を表す用法」と「一時的な属性を表す用法」があるという。前者は性質と、後者は状態と関係が深いと述べ、後者の用法では連用修飾の形が現れやすいとしている。

(3)(持続的)内気でおとなしい美紀さんの性格が奔放不羈な楠見の心をながくつかんでいられなかったのが実情であろう。(婦人生活)

(4)(一時的)今は明子はおとなしくうなずくのであった。(くれない)

(3)は「ある人のそなえている内在的・持続的な性質」の例、(4)は「ある場合における、ある人の態度や動作のようす」の例である。

最後に、「ことの属性」の形容詞は、「むずかしい」「いちじるしい」など、抽象名詞やことを表す名詞句しか主語にとることができないものである。これらには、「とても」「たいへん」のような程度副詞に相当する意味をもつ形容詞「はなはだしい」などが少数ながらあり、主に連用修飾語として使われると述べる。「こよない」は、調査資料内の4例とも、副詞的な「こよなく」の例だという。

(5)ハリウッド剣劇の名優来るっていうんで、バテイスタ大統領は彼を特別謁見し、こよなく、もてなした。(週刊東京)

程度の大きいことを表す語は、主観的な強調や感情的な効果を強める機能を負わされているという。使い古され、新鮮さが失われると新しい表現性の強い語が発生するとし、この供給源として形容詞連用形の副詞的用法があると述べる。これらの形容詞は、副詞的に使われることが圧倒的に多く、副詞とされるものも多いが、「はなはだしい」のように、形容詞の用法を完全に備えた語もあるとする。西尾(1972)において、それぞれの形容詞が述語、連体修飾語、連用修飾語としての用法をもっているかを表し、程度副詞「やけに、とても」との連続性を示していると思われる箇所を、下記表3として示す。(pp. 154-155)

	述 語	連体修飾語	連用修飾語
はなはだしい	+	+	+
いちじるしい	+	+	+
すごい	(+)	+	+
おそろしい	(+)	+	+
ひじょうな	-	+	+
たいへんな	-	+	+
すばらしい	-	+	+
ばかな	-	+	+
こよない	-	(+)	+
いたく	-	-	+
やけに	-	-	+
とても	-	-	+

表3 西尾（1972）における形容詞と程度副詞の連続性

表3を見ると、「はなはだしい」などにはすべての用法があり、「すばらしい」などに述語が、また「いたく」には述語、連体修飾語の用法がないことがわかる。ただし、述語、連体修飾語の用法があるかないかの判定は難しいとも述べている。

以上のように、西尾（1972）は、主体との関係を観点として、形容詞のグループごとに連用修飾用法にあらわれやすい意味を明らかにしている。

### 3.2 橋本・青山（1992）

次に、観点A・Bに関連のある研究として、橋本・青山（1992）を取り上げる。

橋本・青山（1992）は、両氏が作成に携わったIPAL（『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL (Basic Adjectives)』）<sup>4)</sup>の記述を元に、形容詞の三つの用法である、終止・連体・連用用法<sup>5)</sup>がどのように形容詞に分布しているかを述べたものである。ここでいう連用用法は、動詞や形容詞などの述語を直接修飾するものであるから、修飾語用法にあたりと考えられる。この三つの用法は、組み合わせる名詞句や述語動詞によって、用いられかたに異なりがあると述べる。（例文は橋本・青山1992）

(6)a. 実の皮が薄いため、アズマゴールデンのつもりでコンバインで刈り取り、循環性の乾燥機で乾かすとすぐ皮が破れ、実が飛び出してしまう。（朝日新聞1983）

b. 大根は皮をぐるりと薄くむく。（朝日新聞1983）

(7)a. 菊池は気仙沼市でかなりの得票を見込めるが、他地域での支持が薄い。（朝日新聞1983）

b. \* 支持を薄く受ける / 薄く支持する / 薄く支持される

(6), (7)から、「薄い」という語について、「皮」を名詞句にとる場合は連用用法があるとする一方で、「支持」を名詞句にとる場合には、連用用法がないことがわかる。このため、連用形と連用用法は別の概念として区別すべきとする。また、こうした現象は予測不可能であり、辞書に記述する必要があると述べている。

IPALでは、使用頻度の高い、基本的な136語の形容詞見出し語を選出し、それらを類義語や上記のような構文の違いなどにに基づき、547に下位区分している<sup>6)</sup>。そして、終止・連体・連用用法の可能性を1つ以上持つものに限り、IPALで記述した形容詞を特徴づけると、表4のような7タイプに分類できるとした(橋本・青山1992:203)。表4の「+」「-」は、用法の有無を表している。

タイプ	終止用法	連体用法	連用用法	下位区分数
I	+	+	+	180
II	+	+	-	327
III	+	-	+	0
IV	-	+	+	13
V	+	-	-	14
VI	-	+	-	13
VII	-	-	+	

表4 形容詞のタイプ (橋本・青山1992)

表中のタイプVIIは連用用法のみのものである。これは「彼はよく遅刻する」「危なく事故を起こすところだった」のようなもので、「文全体を修飾する副詞」とし、IPALに記載されていない。

さらに「秋が深くなる」のような「なる」「する」を修飾するものは、構文の中で義務的な要素になっているとして連用用法に含めず、「重く、かつ大きい」のような「並列」も、連用用法に含めないとし、タイプIIIの形容詞が1例もないのは、このような制約を加えたためという。

以下に、表4のタイプごとの例として、橋本・青山(1992)であげられた例文を示す。

タイプI 青い(色が青か青に近い)

[終止: +] 空は雲もなくただただ青い。(朝日新聞1983)

[連体: +] 花は枝先に数多くつき、青い空とのコントラストがいい。(朝日新聞1983)

[連用: +] ふだん仰ぎ慣れた秋天も、青く澄んで高い感じがするが、寝ころんでみると、まったく感じが変わる。(朝日新聞1983)

タイプII 苦しい(物や金銭が不足して、困った状態にある)

[終止: +] 連休後は家計のやりくりが苦しい。(朝日新聞1983)

[連体: +] 苦しいやりくりが経済や世の中の動きを映し出しもする。(朝日新聞1983)

[連用：-] \*苦しくやりくりする

タイプIV 軽い(あまり激しくない/簡単な)

[終止：-] \*その練習は軽い

[連体：+] 各チームとも軽い練習をして緊張維持に努めたが、「こんなに雨が続くなら、練習方法も変えなければ」という監督もでている。(朝日新聞1983)

[連用：+] このあと、学校に戻り、校舎などで軽く練習した。(朝日新聞1983)

タイプV 危ない(実現する可能性が低い)

[終止：+] また、十人当選は危ないとの見方もあった仙台市議選は、県議選での敗北が生んだ危機感もあって、十人全員当選という底力も見せた。(朝日新聞1983)

[連体：-] \*危ない当選

[連用：-] \*危なく当選する

タイプVI 苦い(味わいたくないような、不快な)

[終止：-] \*その経験は苦い

[連体：+] 特に、石油ショック後の十年間の物価激動の苦い経験が、物価変動に対するわれわれの抵抗力を強化させた。(朝日新聞1983)

[連用：-] \*苦く経験する

表4をみると、三つの用法を備えたもの(タイプI)は、547の下位区分のうち180しかない。つまり、ここにあげられた形容詞の多くには、いずれかの用法が欠けていることがわかる。一番多いのは、終止・連体用法を備えたもの(タイプII)で、半数ほどはこのタイプに属している。また連用用法が欠けたもの(タイプII, V, VI)は354もあり、6割程度が連用用法を備えていないことがわかる。では、以下に連用用法に関して述べられていることを取り上げる。

連用用法があったものは「意味的な修飾関係」という観点から、「結果」「様態」「程度・量」「心的態度」<sup>7)</sup>の四つに下位区分している。以下に、それぞれの形容詞数がどうであるかを示した橋本・青山(1992)の表と注記を引用する(p. 210)。

連用用法		下位区分数
+ (タイプI, IV)	結果	34*
	様態	57*
	程度・量	98*
	心的態度	10
- (タイプII, V, VI)		354

\* 6件重複あり

例：文章を短く縮める(結果)

文章を短く書く(程度・量)

表5 連用用法の記述結果(橋本・青山1992)

表5の連用用法の例文は、以下の(8)「結果」、(9)「様態」、(10)「程度・量」、(11)「心的態度」のように示されている。

- (8)また、小豆やささげ、甘く煮たうずら豆や黒豆を合わせる地方もある。(高等学校用調理 上1983)
- (9)役所の場合、とかくタテ割り意識が強といわれ、忙しく働いている係りがあるかと思えば、その隣の係は暇そうにしているといった光景がよく見られる。(朝日新聞1983)
- (10)直射日光にあてると油は著しく変化するので、使用ずみの油は揚げかすを十分に除いて、密閉できる容器に入れて冷暗所に保存する。(高等学校用調理 上1983)
- (11)若い米人女性宣教師から楽しく英会話を学ぶグループが藤沢市にある。(朝日新聞1983)

表5をみると、連用用法に多く見られるのは「程度・量」であることがわかるが、「程度・量」に分類した形容詞に関しては、「結果」「様態」に類した性質のものが多い<sup>8)</sup>とされた程度で、あまり詳しい記述がない。このほか、連用用法の有無に関する条件について、次のような指摘がある。

- ①連用用法の有無には、その形容詞が一般的に好ましい性質や状態を表しているか否かということが関係している。
- ②連用用法を持つものは、必ず連体用法を持つ(タイプI, IV)。
- ③形容詞とそれによって連用修飾される動詞との意味的な修飾関係は、動詞の側からだけでは一方的に決定できない。(p. 213)

①は形容詞のもつ評価が関わるものとする。例えば、一般に好ましい状態である「おいしい」は「おいしく作る」と連用用法をとることができるが、反意語の「まずい」は好ましい状態ではないため「まずく作る」は言うことができない、というものである。また③については、「結果」の「丸く切る」と「様態」の「うまく切る」のように、同じ動詞が異なる修飾関係に用いられることがある。そのため、動詞と形容詞の意味的な修飾関係は、動詞の側からだけでは判断できない、という。連用修飾される動詞と形容詞だけをみるのではなく、ガ格やヲ格にたつ名詞句も考慮に入れることで、意味的な修飾関係に関して、より正確な記述結果が得られると述べている。

### 3. 3 宮島 (1994)

橋本・青山(1992)とIPALの記述をうけ、宮島(1994)では、三つの用法全てを備えたものについて、用法の量的なかたよりが、どのようであるかを調べている。これは、「現代雑誌九十種の

用語用字五十音順語彙表・採集カード」のなかに、橋本・青山（1992）で三つの用法を備えたとされた180の形容詞の下位区分がどのように出現するかをみたものであり、観点Aと関わりを考える。

調査の結果、「うつくしい」「しろい」のように視覚的にとらえられる性質は連体用法に、「はやい」「うまい」のように動作にかかわる性質は連用用法に多いことや、「おおきい体」にくらべて「おおきい問題」では連体用法の比率が低いことをあげ、一般に基本的・具体的な意味より、派生的・抽象的な意味では連体用法の比重がさがって、終止用法や連用用法の比重がたかくなる傾向があるとす。また、ある用法に集中せず、比較的満遍なく分布しているものがある（おおい「水分が～」など）ことなどを明らかにしている。つまり形容詞の性質によって、三つの用法のあらわれ方にはかたよがりがあると述べている。

さらに、橋本・青山（1992）で連用用法を認めていないものについて、実際には例があるものもあることを指摘している。ただし、このようなものは、解釈のわかれる余地があるとし、検討のための資料としてあげると述べている。次の用例(12)は、橋本・青山（1992）で連用用法がないとされた、IPALで「色が緑か緑に近い」という意味とされた「あおい」の实例として、宮島（1994）にあげられたものである。

(12)以前はそこだって未だ一面の畠で、広々と麦の穂が青く白くうねっていたのさ（葦4月135）

この他、連用用法の認められていない「おもしろい02」「おもしろい04」「うまい02」「こい02」「たかい01」「ちかい01」「ちかい02」「つよい03」「つよい05」「とおい03」「とおい04」「ながい03」「ひくい04」「やさしい05」「やわらかい06」「やわらかい08」について、連用用法の实例をあげている。なお「02」等の番号はIPALでの意味分類番号である。

宮島は、連用用法をもたないものが6割を超えるという橋本・青山（1992）の指摘を受けて、「形容詞の連用形（連用用法）が形容詞の1用法というよりは副詞への派生ではないか、というふるい疑問にあらたな論点をあたえるかもしれない」（p. 475）と述べている。

### 3. 4 バックハウス（2008）

最後に、バックハウス（2008）を取り上げる。観点Cと関連するのはバックハウスのみであり、日本語教育の視点をもつということでも他の研究とは異なる。

バックハウス（2008）では、「長く住んでいた」のようなものを形容詞の「ク形」<sup>9)</sup>と呼び、形容詞の「ク形」を形容詞の一用法として捉えるか、形容詞から派生した副詞として扱うか、という議論があることを示したうえで、活用の世界は形式的・意味的に規則的であるが、派生の世界は形式的制約や意味的な不規則性が頻繁に起きるとい見解を示している。

また、辞書での取り扱いをめぐって、「予想できない、不規則な項目を親見出または子見出し

にして取り扱う」という原則をあげ、現状では国語辞典が予想できない要素として、「理解のレベル」に注目していると指摘する。「理解のレベル」とは、例えば「よい」と「よく」の意味の違いから、これらをそれぞれ別の見出しとしてとりあげているなどの扱い方である。これについて「使用のレベルの問題もある」と指摘する。「使用のレベルの問題」とは、「短い」は「具体物の長さにも時間の長さにも自然に使われる」のに対し、「イギリスに短く住んでいた人」が不自然な日本語となるように、「短く」は「時間の長さに使われない」というような問題である。

以上のような前提にたち、コーパスとして『CD－毎日新聞1999年版』を用い、18の基本的形容詞「大きい／小さい、長い／短い、新しい／古い、いい／悪い、白い／黒い、重い／軽い、寒い、うれしい、早い～速い／遅い、多い／少ない」のク形の意味のあり方を調べている。その結果、18語中9語に、元の形容詞からは意味や用法が予想できない不規則性が見られたとして、それを表6のようにまとめている（バックハウス2008: 15）。

	形 式	意 味
大きく		
小さく		縮小（具体的な意味のみ）
長く		
短く		縮小（空間のみ）
新しく		
古く		縮小（＝「大昔」）
よく		拡大（量、程度）
悪く		
白く		
黒く		
重く		
軽く		拡大（「軽く超える」など）
寒く	X	
うれしく		縮小（丁寧な表現のみ）
早く～速く		
遅く		縮小（時点を表す場合がほとんど）
多く		
少なく		縮小（限られた範囲）

表6 新聞コーパスによるク形の意味の調査結果（バックハウス2008）

表6の「縮小」「拡大」とは、意味・用法の範囲に関するもので、「X」は形容詞の「ク形」が現れないものである。これは、形容詞の「ク形」に「不規則な要素が多く潜んでいることを示唆する結果」であるとし、このような顕著な不規則性は辞書に載せるべき情報であると指摘する。また、品詞論の観点から言えば、形容詞の「ク形」が「活用よりは派生の世界に属する現象であることを裏付ける」とし、不規則性のない「ク形」があることも事実だが、これは派生によく見られることと述べている。

## 4 総括

以上、形容詞ク形に関する近年の先行研究を概観した。ここでは、それらの論点を検討し、今後の課題を提示する。

### 4.1 形容詞ク形の品詞に関する議論

まず、形容詞ク形の品詞に関する議論を振り返ってみよう。

2節で見たように、副詞的な形容詞ク形の品詞については、副詞とする立場（鈴木1972）と、意味的な一貫性にもとづいて形容詞か副詞か判別する立場（村木2012など）がある。3節に取り上げた研究では、西尾（1972）、橋本・青山（1992）が連用用法しかないものを副詞と認めようとしているが、品詞については正面から議論していない。これに対し、バックハウス（2008）では、形容詞ク形を派生として捉えている点が注目される。派生とは、もはや形容詞ではないということである。

### 4.2 形容詞の統語論的な機能と意味の関係に関する議論

次に、先行研究における形容詞の統語論的な機能と意味の関係に関する議論を整理しておく。

#### 4.2.1 どのような形容詞が修飾語用法をもつのか、もたないのか

この論点を持つ研究は、橋本・青山（1992）と宮島（1994）である。橋本・青山（1992）では、形容詞のもつ評価の良し悪しが、修飾用法の有無にかかわるとし、評価の低いものは修飾用法になりにくいとしている。また宮島（1994）では、用法の偏りから、形容詞が動作にかかわる性質をもつ場合、修飾用法が多いなどとしている。

これらの指摘から、形容詞のもつ意味が、修飾用法の有無や多少にかかわることが窺える。しかし、ここで明らかになったことは、修飾用法の有無に関連する形容詞の意味の一部ではないかと思われる。

#### 4.2.2 修飾語用法の形容詞はどのような意味を表すのか

この論点を持つ研究は、西尾（1972）と橋本・青山（1992）である。西尾（1972）では、「ものに関する属性」「ひとに関する属性」「ことの属性」という形容詞のタイプごとに、修飾用法の現れやすい意味の性質として「動作の結果」「一時的な態度・様子」「程度」をあげた。また橋本・青山（1992）では、修飾用法の「結果」「様態」「程度・量」「心的態度」という分類をあげており、両者のいう修飾用法が表す意味には「結果」「態度・様子（様態）」「程度」という共通点を見出すことができる。

#### 4. 2. 3 修飾語用法の形容詞の意味は述語用法・規定語用法での意味とどのように異なるのか

この論点を持つ研究は、バックハウス (2008) である。バックハウス (2008) の調査では、意味に不規則性が見られた修飾用法の意味は、終止用法・連体用法の意味よりも、制限がみられる「縮小」が多いことがわかる。しかし、意味に不規則性のないものも半数程度あり、すべての修飾用法が終止用法・連体用法とは意味が異なっているわけではないことがわかる。

しかし、バックハウス (2008) の対象とした形容詞は18語のみであり、修飾用法と終止用法・連体用法との意味的差異の傾向をみる対象としては少ない。

#### 4. 3 課題として見えてくること

以上、修飾語として働く形容詞ク形について、形容詞における統語論的な機能と意味との関係について、3つの観点から、先行研究をまとめてみた。ここでは、その結果、何が課題として見えてくるかということについて述べておきたい。

まず、どのような形容詞が修飾語用法をもつのか。あるいはもたないのか、ということについては4. 2. 1で述べたように、形容詞のもつ評価性に関わるなど、統語的機能と形容詞の意味との関係の一部が明らかとなっている。さらに広範囲な形容詞を対象とした調査から、修飾語用法が形容詞にどの程度あらわれるのか、また、どのようなものが修飾語用法をもつのか、あるいはもたないのかを明らかにする必要がある。修飾語用法の有無については、そこに何らかの規則性があるのかについても検証すべきであろう。

次に、修飾語用法の形容詞はどのような意味を表すのか、ということについては、先行研究において4. 2. 2のように、「結果」「態度・様子 (様態)」「程度」「心的態度」などの意味的分類があるとされているが、この意味的分類には、副詞との共通性があるように思われる。修飾語用法が持つ意味に関しては、副詞の表す意味との関係を含め検討の余地がある。

最後に、修飾語用法の形容詞の意味は、述語用法・規定語用法での意味とどのように異なるのか、ということについては、IPALで明らかにされた136語以外は、まだ広範囲の調査はおこなわれていないと言える。残念ながらIPALの成果は、バックハウス (2008) にク形を取り上げる必要性が指摘されたように、一般的な辞典などに反映されていない。また現段階では、修飾語用法では述語・規定語用法よりも用いられる意味の範囲が縮小しているなどの不規則性が多く、その一方で、意味の変わらないものも半数程度あるという報告があるが、調査対象を拡大することで、これが一般化できるかどうかを調査する必要があると思う。

以上のように、3つの観点からの先行研究の調査では、まだ部分的にしか形容詞ク形の実態が明らかになっていない段階だと考えられる。今後、さらに対象の形容詞の範囲を広げ、網羅的・実証的に検討する必要があると思われる。

## 注

1) 「主体」という用語について以下のような説明がある。

問題の形容詞の連用形が、連用修飾関係で結びついている動詞のうち、主体-属性の関係にあるものを調べる。ここで「主体-属性」という用語は一般の用法からは、ずれていると思われる。動作のようすを表す形容詞のばあい、どういう種類の動作のようすであるかを調べたいので、動詞の表す動作に対しても「主体」という用語をあてはめようとするわけである。(p. 42)

2) 西尾(1972)では、それぞれのグループの形容詞について以下のように説明している。

「ものに関する属性」 抽象的なことは持ち得ないもので、(中略) ものの実質的・内容的な性質を規定するもの。(p. 64)

「ひとに関する属性」 物体のもちうる属性ではなく、人を中心とする有情物の属性を表すもの。(p. 109)

「ことの属性」 ものや人の属性を表す語ではなく、抽象名詞などによって表わされる動作・性質その他のことの属性を表わす形容詞。(p. 140)

3) 西尾(1972)の引用の著書・論文は、「発行所・雑誌名や刊行年・号数などを明記するように努めた」(p. 20)としているが、ここは雑誌名までにとどめた。

4) IPAL(『計算機用日本語基本辞書IPAL』)は情報処理振興事業協会において、1987年から1995年に、橋本三奈子氏、青山文啓氏らにより研究・作成された。『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL(Basic Verbs)』『計算機用日本語基本形容詞辞書IPAL(Basic Adjectives)』『計算機用日本語基本名詞辞書(Basic Nouns)』がある。ここでIPALと呼ぶのは『計算機用日本語基本形容詞辞書(Basic Adjectives)』のことである。

5) 橋本・青山(1992)では次のa, b, cのようなものを、それぞれ終止用法・連体用法・連用用法としている。

a. ワインはボルドー産がおいしい。

b. かつおぶしとこんぶを併用すると、いっそうおいしい煮出し汁がとれる。

c. ぬかみそをおいしく食べるには、日常の手入れが必要である。

6) 下位区分について、橋本・青山(1992)の考察の元であるIPALでは、たとえば見出し語「あおい」は以下のような6つの意味区分にわけられている。

01 色が青か青に近い。

02 色が緑か緑に近い。

03 植物の実が未熟である。

04 考えなどが未熟である。

05 光や霧などが暗く、冷たい感じに見える。

06 皮膚が異常に白っぽく、あるいは黒っぽく見える。

本文中で「あおい02」のように示したものは、「見出し語 意味区分の番号」という意味である。

7) 表5の連用用法の分類は以下のように定義されている。

「結果」 動詞で表される動きが実現し、その結果もたらされる主体や対象の状態を示すもの

「様態」 動詞の表される動きの実現のされ方・様態を示しているもの

「程度・量」 述語で表される動きや状態の程度や量を示しているもの

「心的態度」 動詞で表される行為について主体の心的態度を示しているもの

8) 次の1・2は「程度・量」に分類した形容詞であるが、1は「結果」に、2は「様態」に類似した性質であるとし、「程度・量」とした形容詞を、「被修飾語や述語の性質から再検討すれば、違った結果が得られる可能性がある」としている。

- 1 a. 薄い肉の間にシソの葉をはさんで揚げる、香りのいいカツレツです。
- b. 鶏肉は薄くそぎ切りにし、芝えびは背わた・頭・皮を取って軽く塩をする。
- 2 a. それによると、前半は暖かい日もあるが、後半は寒気も入り込み、早い冬の訪れになりそうだ。
- b. ことし、由利原にはいつもより二週間ほど早く春が訪れた。

9) バックハウス (2008) では形容詞ク形を、形容詞の「ク形」と呼び、連用用法、連用修飾用法とはしていない。

## 参考文献

- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 鈴木重幸 (1996) 「品詞をめぐる」『形態論・序説』 むぎ書房, pp. 57-84
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所
- 仁田義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺—語彙論的統語論の姿勢から—」渡辺実 (編) 『副用語の研究』 明治書院, pp. 117-136
- 橋本三奈子・青山文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法：終止、連体、連用」『計量国語学』 18-5, pp. 201-214
- 畠郁 (1991) 「副詞論の系譜」『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』 国立国語研究所
- バックハウス アンソニー・E (2008) 「形容詞の「ク形」を辞書に載せるべきか」『北海道大学留学生センター紀要』 11, pp. 9-18
- 宮島達夫 (1994) 「形容詞の語形と用法」『語彙論研究』 むぎ書房, pp. 475-489
- 村木新次郎 (2009) 「日本語の形容詞—その機能と範囲」『国文学解釈と鑑賞』 74-7, p. 6-19
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房

